千葉県文化財センター調査報告第396集

夷隅町たかもりがだい城跡

—いすみ工業団地埋蔵文化財調査報告—

平成13年3月

千　葉　県　企　業　庁
財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県文化財センター調査報告第396集として，千葉県企業庁のいすみ工業団地建設事業に伴って実施した夷隅郡夷隅町たかもりがだい城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，縄文時代から中世に至る土器・石器等が検出されるなど，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年３月31日

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　中　村　好　成

凡　　例

1　本書は，千葉県企業庁によるいすみ工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県夷隅郡夷隅町須賀谷2,184ほかに所在するたかもりがだい城跡（遺跡コード　442-002)である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，千葉県企業庁の委託を受け，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査は，調査部長　沼澤　豊，南部調査事務所長　高田　博の指導のもと，下記の職員が実施した。

　発掘調査　平成11年12月１日～平成11年12月24日　市原調査室長　麻生正信

　整理作業は，調査部長　沼澤　豊，東部調査事務所長　折原　繁の指導のもと，下記の職員が実施した。

　整理作業　平成12年４月１日～平成12年４月30日　研究員　豊田秀治

5　本書の編集・執筆は，研究員　豊田秀治が担当した。

6　たかもりがだい城跡地形測量図の作成は，麻生の指示のもとで，日経コンサルタント株式会社に委託し，その成果を第２図，第12図で使用した。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁生涯学習部文化課，千葉県企業庁，夷隅町教育委員会，夷隅町郷土資料館　渡邊良記氏，夷隅町公民館　嶺島英寿氏，県立総南博物館　小高春雄氏，財団法人千葉県史料研究財団　石橋宏克氏・松本節子氏ほか多くの方々から御指導，御協力を得た。

8　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

　第１図　千葉県企業庁発行　1/2,500「いすみ工業団地地形図」

　第９図　国土地理院発行　1/25,000地形図「国吉（NI-54-20-9-3)」

9　周辺地形航空写真は，京葉測量株式会社による，昭和42年撮影のものを使用した。

10　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北である。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査の経緯と経過…… 1
　2　調査の方法…… 1
　3　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 4
Ⅱ　遺構と遺物…… 7
　1　概要…… 7
　2　遺構…… 7
　3　遺物…… 8
Ⅲ　まとめ……11
報告書抄録

挿 図 目 次

第1図　調査区の位置と周辺の小字…… 2
第2図　大グリッド配置…… 3
第3図　小グリッド呼称用例…… 4
第4図　A区トレンチ配置図…… 5
第5図　1～4・10トレンチセクション図…… 6
第6図　B区トレンチ配置図…… 7
第7図　5～8トレンチセクション図…… 8
第8図　C区トレンチ配置図，9・12トレンチセクション図…… 9
第9図　遺跡の位置と周辺の遺跡……10
第10図　出土遺物（1）……11
第11図　出土遺物（2）……12
第12図　「たかもりがだい城跡」概念図……13

図 版 目 次

図版1　「たかもりがだい城跡」と周辺の地形・3トレンチ遺物出土状況・9トレンチセクション
図版2　出土遺物

Ⅰ　はじめに

1　調査の経緯と経過（第１図）

千葉県企業庁によって，夷隅町に工業団地の建設が計画され，事業区域内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果，一部を公園として保存し，事業計画の変更が困難な部分については記録保存の措置を講ずることとなり，財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった（第１図）。

たかもりがだい城跡については，平成11年度に発掘調査が実施され，平成12年度に整理作業が行われた。発掘調査は，調査対象範囲3,500㎡のうち359㎡の上層確認調査を実施したところ，明確な遺構の存在は確認できず，本調査に移行せずに終了した。

発掘調査に先駆けて行った地形測量の結果，遺構では，傾斜の緩やかな腰曲輪状の部分が確認され，調査では，縄文時代早期から前期にかけての土器・石器，古代から中世にかけての土器が検出された。

2　調査の方法（第２図～８図）

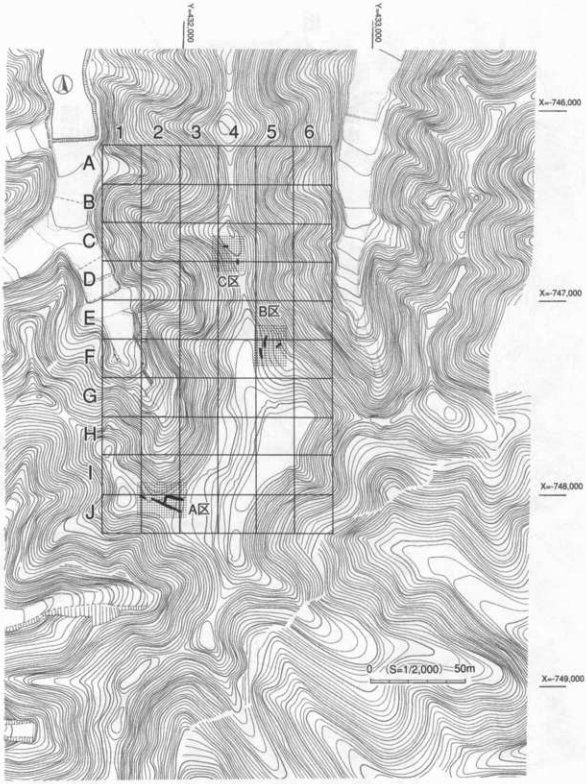
確認調査を実施するにあたり対象範囲全域に，公共座標に合わせて東西南北に20ｍ×20ｍの方眼網を設定し，大グリッドとした。大グリッドの呼称法は，北西に起点を置いて，西から東に１，２，３……とし，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ……として，これを組み合わせて使用した（第２図）。大グリッド内には２ｍ×２ｍに100分割の小グリッドを設定し，北西隅を起点に00，01，02……として南西隅を99とする。グリッド名はこれにより，大グリッドと小グリッドを組み合わせて，8B34のように表示することにした（第３図）。

調査範囲は，公園として残される頂上の平場への進入路となる2本の尾根部のみであるため，調査区はいずれも細長いものであった。従って，確認調査時においては，調査範囲の長軸方向に沿った形と，僅かに認められた平場に対して，任意方向のトレンチを設定した。また，トレンチの設定に際しては，調査区が尾根上にあるため，斜面から一定の距離をおくなど慎重を期した。

確認調査においては，調査対象範囲3,500㎡のうち，現状で確認トレンチの設定できる部分３か所を選び，南からＡ区・Ｂ区・Ｃ区として調査を実施した（第２図）。Ａ区は，2J～3Jグリッドの範囲で（第４・５図），１～２トレンチを設定して調査を行ったところ，二次堆積層が存在することが確認され，この二次堆積層の広がりを確認するため，１～２トレンチをつなぐ３トレンチ，１トレンチを東側斜面に延長した４トレンチを新たに設定した。その結果，４トレンチの東端で硬化面を検出したが，この範囲は，現在において道として活用されており城館等に伴うものではないと判断した。この道による硬化面以外に硬化面や叩き占めの痕跡が見られないことから，この２次堆積層は，版築等の造成面では無いと判断した。また，この二次堆積層の下面に旧表土が見られ，平安時代の須恵器，中世のカワラケが出土し，更にその下層の暗茶褐色土層中において縄文時代早・前期の土器・石器が出土した。遺物の広がりと，遺物に伴う遺構の存否を確認するために，１トレンチの西側に延長した10トレンチ，更にその西側に11トレンチを設定した。しかし遺物の広がりや遺構は確認されなかった。カワラケは，３Ｊ02～３Ｊ03グリッド，石器は３Ｊ12・３Ｊ21グリッド，縄文土器は３Ｊ41～３Ｊ42グリッドからそれぞれ集中して出土する傾向が認められたが，何れも，頂上平坦面から続く傾斜が緩やかになり，平坦面に至る部分であり，流れ込んで来たものと考えられる。以上の結果から，Ａ区においては本調査の必要はないと判断した。

第1図　調査区の位置と周辺の小字

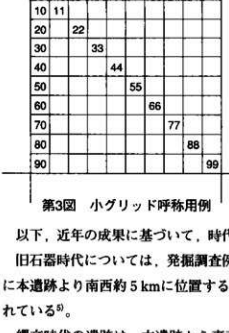
B区は，5E～5Fグリッドの範囲で（第6・7図），5～8トレンチを設定して調査を行ったところ，遺構は検出されず，遺物も各トレンチから1～2点が出土したのみであった。このため本調査に移行せず，確認調査で終了した。



第2図　グリッド配置図

C区は，4Cグリッドの範囲で（第8図），9・12トレンチを設定して調査を行ったところ，遺構は検出されず，遺物も各トレンチから1～2点が出土したのみであった。このため本調査に移行せず，確認調査で終了した。

なお，調査に際しては，安全を考慮しながら，全て人力で行った。



第3図　小グリッド呼称用例

3　遺跡の位置と周辺の遺跡（第９図）

たかもりがだい城跡は，夷隅郡夷隅町須賀谷2,184ほかに所在する。清澄山系の野々塚西斜面を水源にして，蛇行を繰り返しながら，最終的に東流して太平洋に注ぐ夷隅川流域に位置する。遺跡周辺は，河川によって開析された狭い渓谷が形成されている。

本城跡周辺では，横穴墓群や城館跡が多数存在することは古くから知られていたが[1]，発掘調査例はほとんど無く，わずかに万喜城跡[2]・大野城跡[3]の調査が行われている程度である。ただし，表面観察を主とした分布調査が，立教大学考古学研究会によって行われており，多大な成果を挙げている[4]。

以下，近年の成果に基づいて，時代別に周辺遺跡を概観することとする。

旧石器時代については，発掘調査例自体が皆無で，その様相を的確に述べることは困難である。わずかに本遺跡より南西約５kmに位置する台遺跡において，尖頭器・ナイフ形石器と報告された石器が検出されている[5]。

縄文時代の遺跡は，本遺跡から東南へ約４km離れた台地上に展開する西ノ台遺跡[6]から，早期茅山式土器が採集され，前期以降については，西ノ台遺跡から小河川を挟んで約1km離れた松丸遺跡[6]において，前期から後期にかけての土器や石器が採集されている。

弥生時代中期から古墳時代にかけては，本遺跡から東南へ約3.5km離れた峯ノ台Ⅲ遺跡[6]において弥生時代中期から古墳時代後期にかけての土器が採集されているほか，西ノ台遺跡や松丸遺跡からも弥生時代後期から古墳時代後期にかけての土器が採集されている。

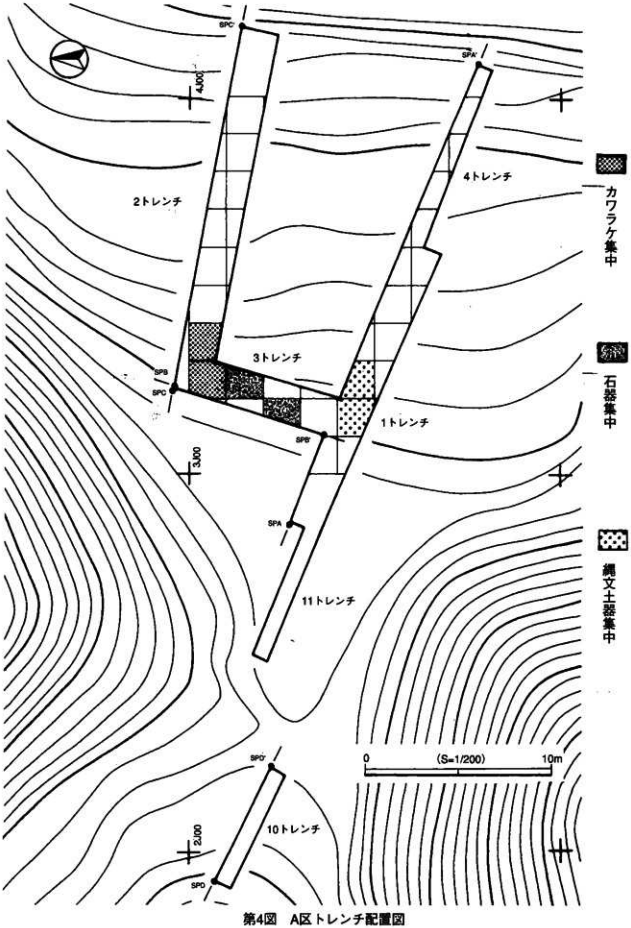
墳丘を有する古墳としては，本遺跡の南へ約２km離れた峯ノ台古墳[6]が挙げられる。墳形は前方後円墳で，明治17年に石棺が発掘された『天神山』[1]がこれにあたるものと考えられる。また本遺跡周辺には，多数の横穴が認められるが，発掘・測量等の調査が及んでおらず，五輪塔が採取された例[6]もあることから，古墳時代の横穴墓かどうかは，明かではない。

奈良・平安時代については，土師器や須恵器が西ノ台遺跡，松丸遺跡で採集されており，これ以外にも本遺跡に近接する油面遺跡・宮ノ前遺跡・上光寺遺跡・白山遺跡等[6]から採集されている。

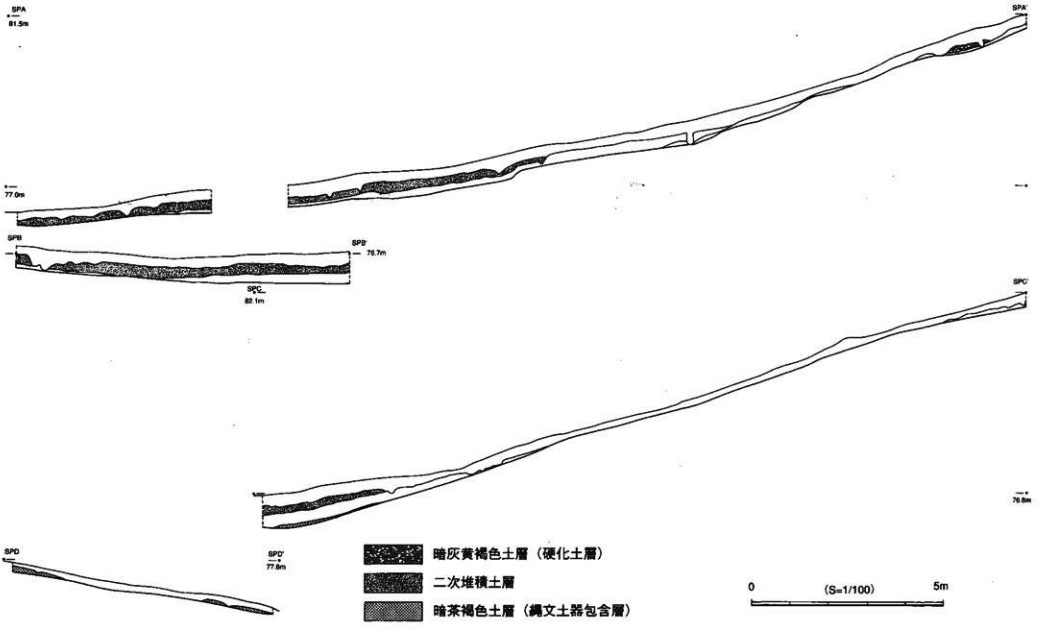
中世においては，夷隅川沿いの松丸遺跡において陶器類が採集されているほか，万喜城・大野城・権現城[4]と言った城館跡，込立やぐら[4]等が確認されている。

万喜城については，土岐氏が居城としていたとされているが，土岐氏の出自や系譜・築城時期等については不明な点が多い。しかし，15世紀末以降，安房を支配した里見氏との間に婚姻関係をもつようになったことから，15世紀代には，万喜城を中心にした支配体制を確立していったものと判断できよう[2]。

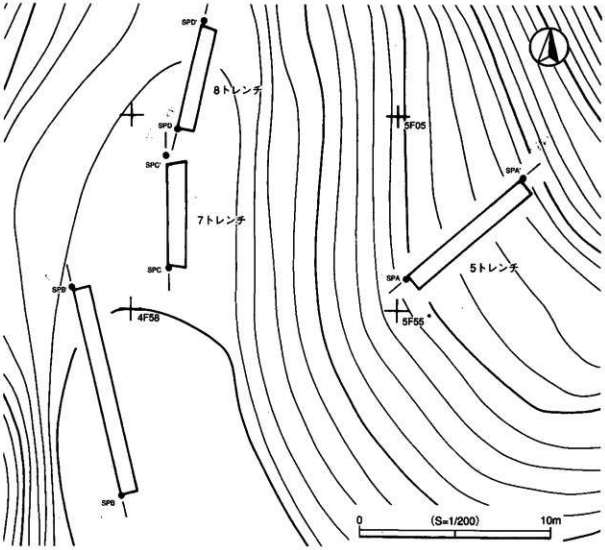
注１　夷隅郡役所　1923「千葉縣夷隅郡誌」
２　伊藤智樹ほか　1984『千葉県中近世城跡研究調査報告書　第５集　―大崎城跡・万喜城跡発掘調査報告書―』　千葉県教育委員会
３　橋口定志ほか　1978『大野城跡発掘調査報告』　大野城跡緊急発掘調査会
４　立教大学考古学研究会　1974『千葉県夷隅川流域分布調査報告書（埋蔵及び石造文化財資料編）』
５　野中徹ほか　1976『行川台遺跡－埋蔵文化財発掘調査概報－』夷隅町
６　夷隅郡教育委員会　1987『千葉県夷隅町埋蔵文化財分布地図』



第4図　A区トレンチ配置図



第5図　1～4・10トレンチセクション図



第6図　B区トレンチ配置図

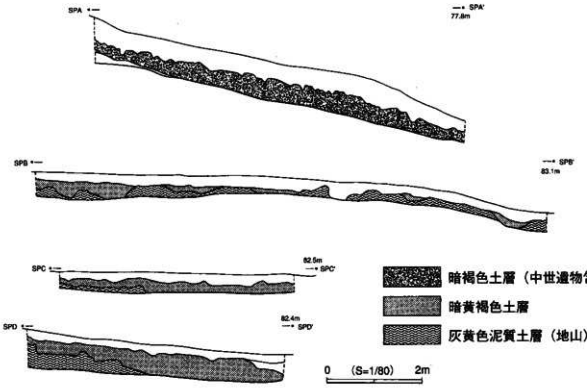
Ⅱ　遺構と遺物

1　概要

今回の調査は，公園として残される部分への進入路の敷設に伴うもので，丘陵の尾根部が対象範囲となり，トレンチ11か所，359㎡の確認調査を実施したが，明確な遺構の存在は認められなかった。しかし，今回の調査範囲とその周辺において，幾つかの平場と尾根の掘削が確認された。遺物は縄文時代早期から前期にかけての土器・石器，奈良・平安時代の土師器・須恵器，中世のカワラケ，近世の陶磁器，時期不明の椀形鍛冶滓が，トレンチ内から検出された。

2　遺構

公園として保存される頂上部分は，平坦な面が細長く広がり，ここから下る斜面のいたる所に，傾斜が緩やかになる部分が認められた。また，頂上平場の北端から北へ170ｍ程離れた地点と，西へ100ｍ程離れた地点において，尾根が狭くなり，若干窪んだ地点が認められた。前者は平場，後者は尾根の掘削と捉えられよう。



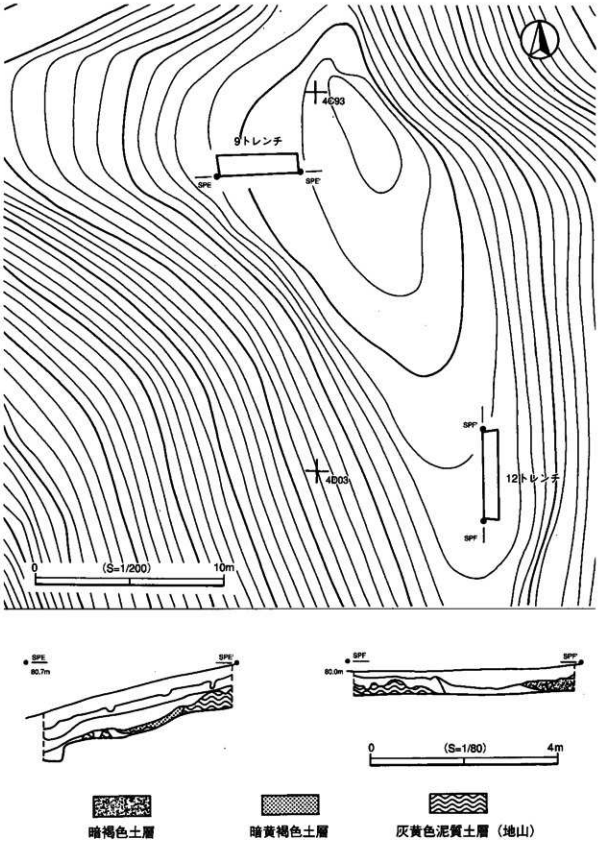
第7図　5～8トレンチセクション図

3　遺物（第10図～11図，図版２）

第10図１～３は，縄文時代早期の土器である。１は，縦位に撚糸文が施されており，色調が黄褐色を呈していることから早期撚糸文系の土器と考えられる。２は，無文だが，裏面に横方向の擦痕が認められることから，子母口式期の土器と考えられる。３は，無文だが，口縁がやや外反する形態から田戸上層式期の土器と考えられる。

４～22は，縄文時代前期の土器である。４～６は，胎土に繊維を含んでおり，表面が赤味を帯びた褐色を，内面が黒色を呈している。文様は目の大きい縄文が施され，６の上げ底状の底部近くには，ループ文が施されていることから，関山式期の土器と考えられる。７～９も胎土に繊維を含むが，器面は黒味を帯びた暗褐色を呈している。目の粗い縄文が施され，裏面が丁寧に磨かれていることから，黒浜式期の土器と考えられる。10は，波頂部が隆起する口縁で，口唇部に断面U字形を呈するキザミが施されている。11～13は，半截竹管による平行沈線と爪形刺突が施されている。14は，内湾する口縁で，半截竹管による平行沈線が施されている。15は，半截竹管による間隔の狭い平行沈線が施されている。16～20は，地文にRLの縄文を施し，浮線を貼りつけている。浮線上にはキザミが施されている。16・17は，内湾する口縁で，16には，イノシシを模したと思われる獣面の装飾が施されている。色調は，10・11・15が赤味を帯びた明褐色であるのに対して，12～14，16～20は灰色がかった暗褐色を呈する。10～20は，諸磯ｂ式期の土器と考えられる。21～22は，裏面が磨かれ，表面は横走する変形爪形文によって区画された中に，細沈線の菱形文が施されている。浮島式期の土器と考えられる。

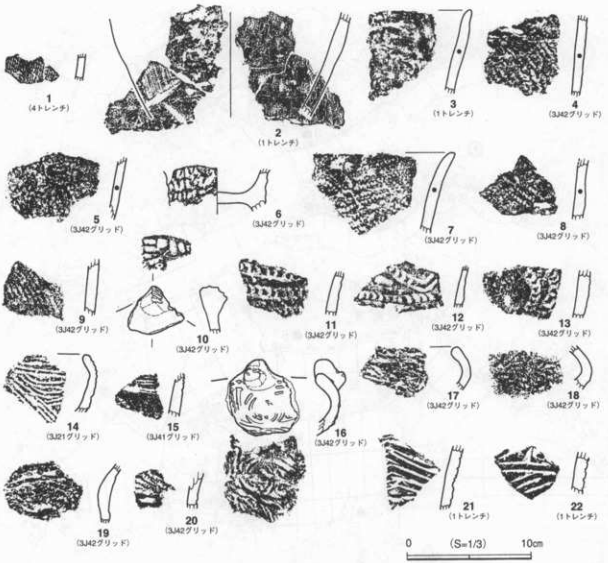
第11図１～３は，黒曜石の剥片である。１は，表面に石核の主要剥離面を残す縦長剥片である。打面側と先端部の表面に細かい剥離痕が認められており，両極打法による楔形石器の可能性もある。２は，両側



第8図　C区トレンチ配置図、9･12トレンチセクション図

第9図　遺跡の位置と周辺の遺跡

1　たかもりがだい城跡
2　油面遺跡
3　白山遺跡
4　宮ノ前遺跡
5　上光寺遺跡
6　込立やぐら
7　峯ノ台Ⅲ遺跡
8　松丸遺跡
9　峯ノ台古墳
10　西ノ台遺跡
11　権現城跡
12　万喜城跡

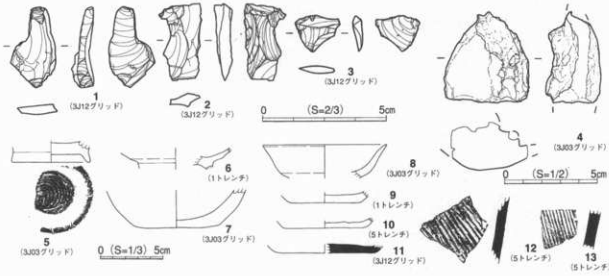


第10図　出土遺物（1）

縁からの両極打法による楔形石器と思われる。3は横長の剥片である。4は，表面が溶解して滑らかな状態を呈し，裏面は砂に覆われている。製鉄炉の炉壁滓と思われる。5～10は，素焼きの土器で，5・6は杯の高台部，7は甕の底部であり，奈良・平安時代の土師器と考えられる。8～10は中世のカワラケと考えられる。11～13は平安時代の須恵器で，11は杯の底部であり，12～13は表面に叩き目が認められ，甕又は甑と思われる。

Ⅲ　まとめ

今回の調査では，進入路整備部分という極めて限定された調査範囲であったため，遺跡の全容を解明することは困難であるが，縄文時代早期から前期にかけての土器・石器，奈良・平安時代から中世の土器等が検出され，該期における東上総の人間活動の一端を垣間見ることができた。何れも遺構を伴わないため，生活内容について言及することはできないが，その出土位置から，東側の頂上平坦部が生活域で，遺物等はそこからの転落と考えられる。

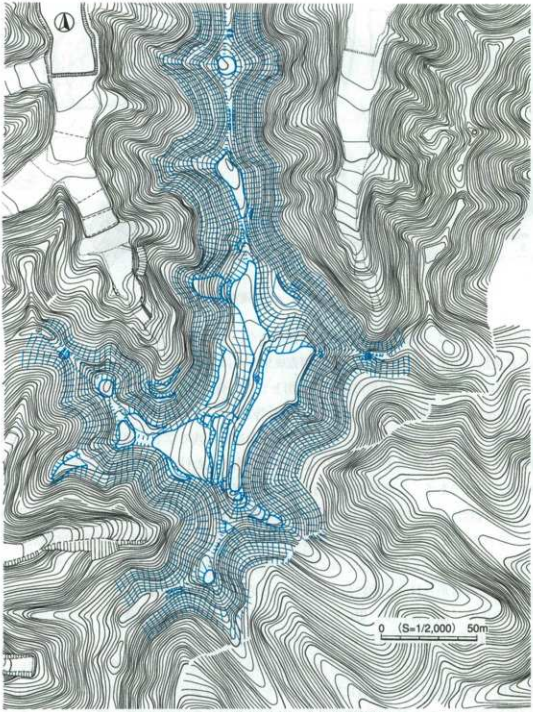


第11図　出土遺物（2）

頂上平坦部については，城館の郭である可能性が高く，今回遺跡範囲の一部を地形測量したところ，幾つかの平場と尾根の掘削を確認した。今回の調査成果からは，積極的に城館跡の可能性を示すものは確認できなかったが，平場を曲輪，尾根の掘削を堀切とした場合，頂上の細長い郭を中心にして，南北300m以上，東西150m以上の範囲に，20か所以上の腰曲輪等を配した山城が想定できる（第12図）。

中世城館跡としての「たかもりがだい城」は，南側山裾部に残る字名に城ノ内・殿下・蔵ノ内と言った城館に関る地名が認められたこと（第1図）と，字城ノ内に住む住人が，言い伝えとして語ったことによって認識された遺跡である。この城館跡を指す文献的な資料は確認されていないが，近接する小又井に所在する宝泉寺の縁起には「承和元年（834年）慈覚大師（円仁）の開創，菅谷城主高盛公の中興」と書かれており[1]，これが「たかもりがだい城」を指している可能性がある。但しこの縁起は明治45年に書かれたものであり，信憑性は乏しい。ただ，かつて南総里見氏が万木土岐氏に戦いを挑んできたときに，迎える土岐頼春は，菅谷村から日之子坂に将士を配したと言う記録と，庁南武田氏が万木城を攻めたところ返り討ちに合い，火の子坂において，更に追い討ちを食らったと言う記録が残されている。本遺跡の東山裾を，南北に走る南総広域農道において，睦沢町との町境の坂道が「ひのこざか」と呼ばれており（第9図×印），両戦いに出てくる「日之子坂」「火の子坂」がこれに相当する。南総里見氏との戦いは，天正16（1588）年長月「土岐頼春は（父頼貞に城を守らせ）自らは蚊壷沢に陣をしき，一隊を岩正山に伏兵し，国府台には梶五郎兵衛，松丸村には麻生主水と，山中甲斐守・藤原源五郎等は騎士一二〇，野武士三〇〇人を率いて菅谷村から日之子坂と，各方面に将士を配置して断乎撃退の態勢を整えた」（『房総軍記』）[2]と記されている。また庁南武田氏との戦いは，翌天正17（1589）年卯月「（万木の）城兵ハ彌増シ力ヲ得テ遂フコト急ナリシカバ，菅谷大神ノ境火子坂ト云フ處ニテ廳南勢十六七人取テ返シ，踏留リテ戦ヲナシ殘ラズ命ヲ殞シケリ」，（『関八州右戦録』）[3]と記されている。

今回調査した「たかもりがだい城跡」が城館跡であるとは断言できないが，「ひのこざか」が国境として重要な位置を占めていたことは間違いなく，この周辺に城館或いは一時的な砦が築かれた可能性は充分指摘できよう。今後，保存地域として残された頂上の平坦部や，この周辺の更なる調査によって，中世における夷隅町や東上総地域の様相が明らかになるであろう。



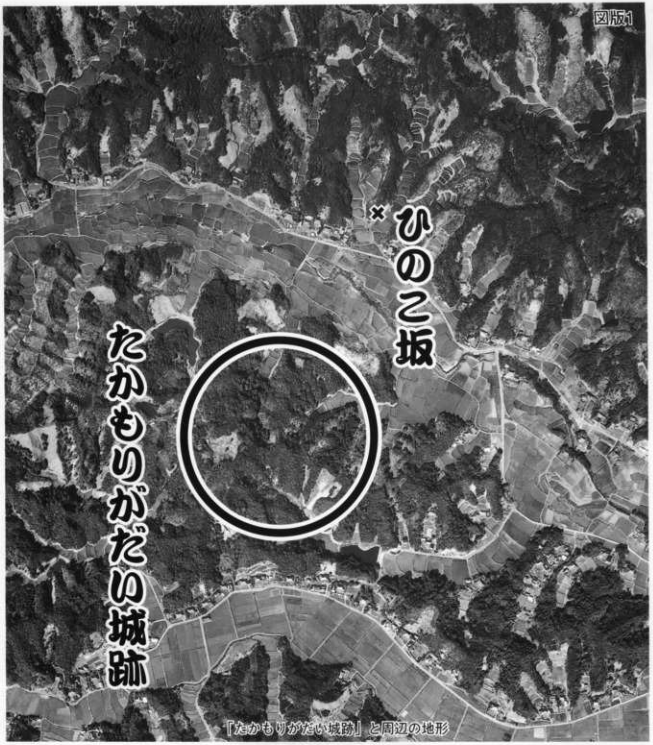
第12図　「たかもりがだい城跡」概念図

注1　森　輝　1977『夷隅風土記』　千葉県文化財保護協会

2　睦沢村村史編さん会議　1977『睦沢村史』　千葉県長生郡睦沢村

3　夷隅郡役所　1923『千葉縣夷隅郡誌』

図版1

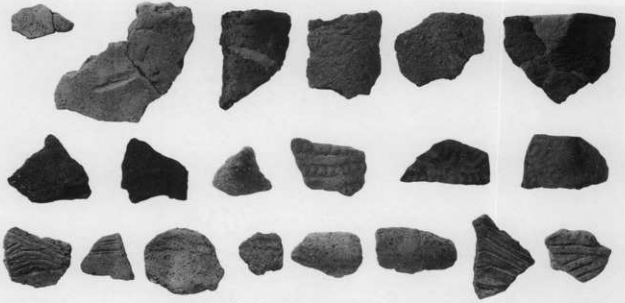


『たかもりがだい城跡』と周辺の地形

3トレンチ遺物出土状況

9トレンチセクション

図版2



第10図 1～5、7～15、17～22

第10図 2（裏）

第11図 1～3

第11図 7

第10図 6

第11図 4

第11図 8

第10図16

第11図 5

第11図12～13

出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	いすみまちたかもりがだいじょうあと
書　　名	夷隅町たかもりがだい城跡
副 書 名	いすみ工業団地埋蔵文化財調査報告
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号編	第396集
著 者 名	豊田秀治
編 集 機 関	財団法人　千葉文化財センター
所 在 地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2
発 行 年 月 日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コ ー ド 市町村	 遺跡番号	北 緯 ° ′ ″	東 緯 ° ′ ″	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
たかもりがだい城跡	千葉県夷隅郡夷隅町須賀谷2,184ほか	12442	002	35度 19分 14秒	140度 18分 34秒	19991220～ 19991224	3,500㎡	いすみ工業団地建設に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	主 な 遺 物
たかもりがだい城跡	城　跡	縄文時代 平安時代 中　世	なし	縄文土器・石器・土師器・須恵器・陶器・鉄滓	夷隅川下流域の，丘陵面に展開する中世の遺跡である。

千葉県文化財センター調査報告第396集

夷隅町たかもりがだい城跡

— いすみ工業団地埋蔵文化財調査報告書 —

平成13年3月31日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　千　葉　県　企　業　庁

千葉市中央区長洲1-9-1

財団法人　千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印　　刷　　株式会社エリート印刷

千葉県成田市並木町44-20